

兄の仇討ちという現役志願

山形県 高橋 敬 吉

私は、大正十五（一九二六）年六月二十五日、吉野村（現南陽市宮内）の農家の四男として生れました。入隊前の家族の状況は当時、農地は田地六反歩、畑地一町歩で、畑地のほとんどは桑畑で、養蚕を主とした農家でした。養蚕専業の祖父、森林業兼業の父、家庭を守る母、父を補助する長男、蚕の餌用桑の葉摘み、繭の処理、生糸巻取り作業などをする姉三人と妹一人の九人の大家族でした。ほかに昭和十五（一九四〇）年に病死した二男と十八年に北支で病死した三男がおりました。

戦前この地方は、私の家を含め養蚕農業が多く、繭からの生糸を生産し絹織物で家計を支え、活気があつたのですが時代の流れには勝てず、今は養蚕農家も無くなり、ほっそりとした集落に変わっております。

また近くに赤湯温泉があり、この温泉は寛治七（一〇九三）年、八幡太郎義家の弟義綱が発見したといわれ、戦いで傷ついた家来達を入れるとたちまちのうちに治り、傷から出た血によつて深紅に染まり、それが「赤湯」のいわれとされています。現在商店街に十四軒ほど混在する温泉宿には県内外から多くの湯治客が訪れております。

私は、昭和十五年三月、吉野村村立尋常高等小学校を卒業と同時に家業の手伝いをしておりましたが、昭和十九年三月三日、徴用令により横須賀海軍航空技術廠に入廠して航空機のプロペラの部品製造に従事しました。この職場に監督に来る軍服姿の将校に刺激されたこともあり、かつ昨年北支で戦死した兄の仇討ちのため軍人になることを覚悟し、家族の了解を得て現役志願しました。そして希望通り甲種合格となり、家族始め周囲の方々の祝福受けました。

入隊は昭和十九年九月五日でした。時節柄家族の見送りは禁止されていたので、家族には玄關で

別れを告げ宮内駅に向いました。駅に着くと、この待合室にいた多くの方々からも励まされましたが、一人の松葉杖の四十過ぎの見知らぬ男性から「俺は新潟の者だが俺のように傷ついても必ず帰って来いよ」と励まされました。

宮内駅から部隊所在地の山形駅に着き駅から徒歩で東部第五十九部隊へと急ぎました。部隊の門を通り衛兵に軽く会釈して兵舎に向った途端「コラッ、こっちへ来い」と怒鳴られ衛兵の前に行く。「上衣のボタンが外されている、掛けて敬礼して行け」と注意される。「駅ではボタンは掛けていたが、急いだため汗をかき、途中で外してしまい、失礼しました」といいますと、「文句いな」と怒鳴られました。

入隊手続きと身体検査も無事終わり軍服に着替えて、先輩が準備してくれた夕食をすませ、夜の点呼の際にはいろいろと注意や指導を受け、軍隊での初日の眠りにつきました。

翌日は銃、銃剣等の兵器や被服類が渡され、兵

器の手入れ方法、被服類の整理整頓、補習の仕方等々を教えてもらい、また食事の準備、内務班、下士官室、厠、洗面所等の掃除方法まで教育を受けました。

三日目からは本格的な軍人訓練が始まりました。

一番身にこたえた演習は、防毒マスクを装着しての匍匐前進の訓練と駆足訓練で、途中で倒れる者もありました。二週間過ぎたころから、入隊前に聞かされていた先輩からの私的制裁が始まりました。その理由としては、銃の手入れが悪い（個人の物の内務班長並びに先輩のもの）、内務班出入り時の態度が悪い、声が低い、編上靴の手入れ悪い、靴下、衾布、敷布、枕カバーが汚れている、巻脚絆の巻き方が悪い、衣服の重ね順序が違う等等です。

そして制裁の内容としては、拳での往復ビンタ、編上靴で造ったスリッパでの往復ビンタ、編上靴の底を舐めさせる、初年兵同士での對抗往復ビンタ、満水の掃除バケツ両手に持って長時間の不動

の姿勢、柱へ上がって蟬の鳴き真似、鷲の谷渡り
などです。

私は三歳若い志願兵のため「高橋、貴様はまだ
未成年のぼっちゃんだから手加減してやる」と軽
く済まされました。

—私の戦歴—

昭和十九年十一月二十六日、支那派遣を拝命、

下関出航、同日釜山上陸

十二月六日、鮮満国境通過。十二月七日、山

海関通過

十二月十日、中支、湖南省湘潭に集結、同地
の警備に当る

昭和二十年四月二十五日、至威第一七七七部

隊要員として湘潭を出発

五月三日、私は機関銃手でしたので、機関銃
を担いでの九日間の行軍は随分苦労しました。

夕刻、長沙付近の山岳地に到着、佐藤隊に編
入されましたが、行軍の疲れから熱を出して、
二日ほど衛生班の世話になりました。そして

体調回復後は「トーチカ」構築中の小隊に合流
して穴掘作業に当りました

六月五日、作戦命令で長沙出発

六月八日、岳洲に到着。翌九日先着分隊が五
百メートル前方で中国軍と交戦、十人の死傷
者が出ましたが、その後安定した日が続きま
した

八月十一日、陣地警備中の二個分隊が中国軍
の狙撃を受けましたが、死傷者はありません
でした

八月十二日、本部からの作戦命令の時刻より
一時間早く作業に出たため一個小隊が全滅し
ました

八月十五日、終戦・武装解除

八月十六日早朝、隊長の重大訓示があるから
全員広場に集合するよう班長から指示あり、
全員集合すると隊長から「無念であるが、大
日本帝国は昨日無条件降伏した。本日午後か
ら中国軍に兵器の引渡しをするので、朝食後

直ちにこの広場に全兵器を運ぶこと、兵器係は兵器別の員数表を作成して本部に報告せよ」と涙を浮かべての訓話がありました。我々全員呆然として、涙を流し無言のまま兵舎に戻る。

無言での朝食後、直ちに広場へ兵器の運搬作業、午後二時ごろ、中国軍高官引率の自動車部隊が来る。戦勝国である中国の高官から先に隊長に手を差し延べて握手を求められた。自動車への積み込み作業は何のトラブルもなく無事終了、丁寧に会釈して立ち去りました。隊長の取り計らいで夕食は中国酒（チャンチュウ・パイチュウ）で敗戦の悲惨さを語り合い、今後の問題について、酔いが回って勢いが付き、夜更けまで話し合いました。八月十七日、十二日の作戦で全員戦死という情報のあった小隊の先輩上等兵一人が、中国兵二人に連れられて無傷で帰隊しました。終戦後は中国軍の指揮下に入るも、使役等

一切無く、また警備兵も親切に接してくれ自由に行動出来た。食糧は二カ月間ほどは在庫品があったが、その後は宣撫班が保管していた「アヘン」と物々交換したり、地域住民から善意で寄贈された雑穀、野菜に助けられた。地域住民の方々は二、三日前までは敵味方で睨み合ったにもかかわらず、何も無かったように接してくれ、互いの国の言葉で話し合い、勉強になりました。

以上のように、先に述べた兵器引渡しの際の中国軍高官などの態度、捕虜の連れ戻し、食糧の寄贈等、もしこれが逆の立場だったら果して日本軍は同様に行っただろうか、疑問に思う。

昭和二十一年六月二十日、上海港より海防艦に乗船、出航、

六月二十二日、佐世保港上陸、身体検査、防疫、復員手続きを終えた後、食糧・旅費を受領する。

六月二十四日、お互い再会と日本の復興に尽すことを誓い合い、涙ぐみながら別れを惜しむ。佐世保出發、途中、車中に一泊

六月二十六日、復員局の取り計らいで家には到着時刻等を連絡しておいたので、家族、親戚、知人等大勢の方々が駅まで迎えに来ており、帰宅後、無事復員の祝宴をして頂く

復員した時の郷土は、食糧はじめ物資不足で、村の商店はほとんど閉店しており、絹織物をする織機の音も聞こえず、静かな寒村に変わっていました。我が家では、祖父は死亡、父は養蚕をやめて専ら森林業で、伐採木を現場から一本一本馬に引かせて麓まで下げ、馬車で製材所へ運搬していました。母は専業主婦、兄は父の補助、姉一人は嫁入り、姉二人と妹は近くで働き家計を助けておりました。

私は復員当時は父の補助として作業しておりました。昭和二十七年四月十日結婚して宮内村（現在南陽市）に分家しました。

このころ安い外国材が輸入されて国産木材は不況になり、製材所の倒産、廃業で森林業の経営は苦しくなってきました。そこでトラックを購入して、雑木をパルプ材として新潟の製紙工場に販売する業務を開業、現在は長男が引継ぎしています。顧みますと僅か二年足らずの軍隊生活でしたが、辛いことあり、反面楽しいことも多々あり、これが生きるための力を与えてくれました。

最後に、戦陣で倒れた戦友、戦禍の犠牲になられた幾多の人々に心から追悼の意を表わしますが、戦争の悲惨さ、戦陣及び戦禍で亡くなられた方の無念さ、遺族の悲しみなどが世代の経過と共に失われつつあることに悲しみを感じます。

現在「命」ある我々戦争体験者は、今次大戦が愚かで悲惨な戦争であったことを思い起して、体験の労苦を後世に語り継ぐ義務があると思います。

永久に、二度と戦争を起こさない、参加しない、平和で美しい日本であること願う者です。